

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：35102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K15800

研究課題名(和文) 熱帯感染症看護の教材開発を目指したケアプロトコール作成

研究課題名(英文) Protocol preparation aimed at the development of teaching materials of tropical infectious diseases nursing

研究代表者

荒川 満枝 (Arakawa, Mistue)

鳥取看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00363549

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：フィリピンにおける熱帯感染症患者への看護ケア実践方法を調査し、体系的に統合して、日本で使用できる熱帯感染症ケアプロトコールの作成を目指して、熱帯感染症看護についての調査を行った。WHOやフィリピンの保健省(DOH)の統計情報と研究協力者との意見交換を経て、調査する感染症を絞り込み、フィリピンの感染症専門病院での調査を行ったが、十分な情報が得られず、デジタル情報や感染症に関する看護の教科書、有用な資料を多数手に入れることで補った。

研究成果の概要(英文)：We aimed to write protocols of nursing care for the Japanese patients of tropical infectious disease. The survey of nursing practice for the patient and systematical organization were planned. After learning through statistical of WHO and DOH (Department of Health in Philippine) and advices from co-researchers, we targeted some infectious diseases. And we harvested useful information and experiences to care the patients and the diseases redeeming the distal information about infectious diseases and textbooks.

研究分野：感染看護

キーワード：熱帯感染症 感染症看護 看護技術 国際看護

1. 研究開始当初の背景

デング熱、マラリア、破傷風、腸チフス、赤痢、コレラ、狂犬病、レプトスピラ症などおもに熱帯地域で流行する感染症（熱帯感染症）は、日本での罹患が無い、または少ないため、日本の医学界では大きく取り上げられることが少ない。看護学の教科書の中でもこれらの熱帯感染症について記述があるものは少なく、たとえ記述がなされていても疾患名として提示される程度で実際の看護に活かすためには十分とは言えない。それは医学教育でも同様で、現実に疾患そのものを日本の看護学実習の中で経験することが皆無に近い。また教育者自身が体験していないことが多い。その看護に関して十分な教育がなされないのは必然と言えよう。

一方、全世界的な航空輸送の目覚ましい発達による国際化、ボーダレス化により、旅行者によって、また媒介動物の混入や密輸等で、感染症が持ち込まれる可能性を年々高くなっている。旅行者の嗜好の多様化により、媒介動物が棲息する地域での体験型のオプションが付いたパック旅行に、感染症に関する知識を持たずに参加する例も多い。近年、フィリピンのマニラで犬に噛まれ、帰国後狂犬病を発症した例や、毎年多くの日本人が海外で感染症に罹患し、国内で発症していることが感染症研究所より報告されている。この状況を受けて、感染症の専門学会や旅行医学界では、本邦での未経験または経験の浅い疾患の発生とその対処の遅れを懸念している。

さらに、地球温暖化が着実に進んでいる報告があり、今後媒介動物の生態系が変化して、日本にもこれらの感染症が蔓延することも十分考えられる。デング熱の国内発症が話題となったのも、このような状況が背景にある。

研究代表者は、看護師として熱帯感染症の研究に携わってきた背景を踏まえて、これまで5年に渡って毎年フィリピン共和国（以下フィリピンとする）国立サン・ラザロ感染症専門病院にて、日本の看護学生の実習指導をしてきた。また実習に先立つ自身の研修の際、熱帯感染症患者に実際に関わってきた。これらの経験から、看護師の情報収集能力とアセスメント能力に基づいた看護ケア能力が患者回復の鍵を握っている事を強く感じている。しかし、日本の看護師向けに熱帯感染症看護を体系的に記述したものは見当たらないのが現状である。

2. 研究の目的

フィリピンにおける熱帯感染症患者への看護ケア実践方法を調査し、体系的に統合して、日本で使用できる熱帯感染症ケアプロトコルの作成を目指して、熱帯感染症看護についての調査を行う。

フィリピンにおける熱帯感染症看護の実際を調査し、その根拠を確認・整合し、体系化することで、日本での熱帯感染症看護のプロトコルを作成し、さらなる教材作成の基

礎を築くため本研究を志した。研究代表者は感染症ケアを専門とするが、フィリピンの感染症看護の専門家とはこれまで5年の歳月をかけて厚い信頼関係を築いており、研究協力の同意も得られている。これは、国際的な看護教育教材開発へつなぐ足がかりとなるものである。

3. 研究の方法

フィリピン共和国での本格的な調査の前に、フィリピン共和国での協力体制を構築し、それを維持することが最も肝要であった。フィリピンの国立感染症専門病院（サン・ラザロ病院）の協力を得るとともに、院内で看護師教育部門所属の看護師管理者からの協力、その他の協力者も得ることができ、情報を集めることができた。併せてフィリピンの熱帯感染症看護について、患者の紹介や状態の測定や撮影、症状の確認やそのケアについての実施や解説を聴くことができた。

文献の調査に関しては、WHO やフィリピンの保健省（DOH）の疫学データを基盤とした。また、感染症の教科書については英語で書かれているものについて各種検索を実施した。また、前述の協力者より助言をもらい、フィリピンの看護系大学で使用されている感染症看護に関する教科書等の紹介、当該の感染症専門病院で使用されている感染症看護ケアの教科書を入手した。

以上の教科書や文献の検索を経て、ケアプロトコルを作成すべき、調査対象とする感染症の種類を決定した。ただし、患者の発生状況や、患者側の協力の如何によってデータ収集が適わない場合もあり得ることは、想定することとして研究者間で打ち合わせた。以上を経て、一つ一つの疾患について、可能な限り症例に立ち会い、記録を行った。ただし、研究期間中に協力者の異動やメールで連絡がつかない時期があるなど、渡航予定にも影響することが多々あった。

研究期間の半ばで、フィリピンの調査について、新たな症例を得ることが難しく、また前述の通り連絡の継続が困難な時期が生じることもあったため、マレーシアでも調査を行えないか、マレーシア大学サバ校で、本研究について相談したところ附属の看護専門学校（看護学部設立を検討中）をご紹介いただき、手配を行うことができた。

4. 研究成果

(1) フィリピンの感染症の状況

文献やWHO やフィリピンの保健省（DOH）の疫学データより、フィリピンを含む東南アジアでは、生活レベルの向上と共に、疾病構造が変化しており、生活習慣病が死因として増加していて、糖尿病や悪性新生物が最も注目されているが、感染症の死亡率は依然として高い割合であることが確認できた。ただし、衛生状態と栄養状態の改善により、症例が減少していることは確かで、院内

で見られる感染症の種類もやや変化してきており、訪問時に調査できる症例が限られていた。

(2) 感染症患者の実際のケアからの情報収集

感染症系の学会からの情報収集や、前述の統計データと、研究協力者との討論を経て、対象とする感染症を水痘、風疹、麻疹、結核、AIDS、狂犬病、デング熱、日本脳炎、マラリア、レプトスピラ症、破傷風、髄膜炎、A型肝炎、腸チフスの13種類とした。これらに絞って訪問時に患者を紹介いただき、そのケアに同行した。タイミングよくケアに同行できたのは、結核、狂犬病、デング熱、レプトスピラ症、破傷風、髄膜炎であった。訪問するシーズンを調整し何度か訪問し、最善を尽くしたが、他の疾患に関しては元々の患者が減少していて症例がないこと、訪問時に偶発的にその症例がなかったこと、倫理上の問題や患者の意向(AIDS)で患者に会うことが難しいことなどで同行が適わなかった。また典型的または一般的な症状も、患者の病期によっては、全て確認できるような状況ではなかったため、解説やカルテに依って理解することも多かった。写真等の撮影に関しては、患者の顔が映らないよう倫理的に配慮して、必ず許可を得て行った。撮影後には必ず複数人で倫理的問題がないかを確認した。結核病棟へは2回伺い、その度に撮影を依頼したが、適わなかった。

長期間現地に滞在し、確たる信頼を得るなど、研究の方法の更なる工夫がなければ、これ以上の情報収集は難しいと感じる場面も多々あった。

(3) 感染症専門病院の感染症に関するデータ(ビデオ教材)情報の入手

実際の患者さんについて観察が適わなかったものや、十分な観察やケアができなかったものについては、患者の症状や療養、疾患の予防についての、病院オリジナルのビデオ教材を手に入れることができた。

(4) フィリピンの基礎看護教育で使用されている教科書の収集

教科書の調査に関しては、英語で記述された熱帯感染症に関するものを検索・収集したが、ほぼすべてのものが症状(病原体の詳細な記述を含む)・治療法・予防法・感染経路の遮断方法について書かれているもので、看護師によるケアの視点が書かれているものはほとんどなかった。ただ、フィリピンの感染症専門病院で使用されている、看護師が著した教科書「Handbook of COMMON COMMUNICABLE and INFECTIOUS DISEASE」(図1)だけは、看護の視点での記述があるものであった。この記載は、各感染症を取り上げた各論の各章の終わりの方に「看護管理」「看護診断」として、箇条書きで掲載されていた。このような記載は、他

の教科書にはなく、当該の感染症専門病院でも役に立つ教科書と認識されていた。教科書の装丁は極簡単なもので、使われている用紙も質の低いものであった。また、記載内容も、箇条書きに抑えられており、非売品であることから、出版のコストを考慮したものと推測された。実際、フィリピンで使用されている看護基礎教育のための教科書は、アメリカの出版社のものが多いが、装丁や用紙を安く抑えて販売価格を抑えるようにしているとのことだった。しかしながら、内容に関して注目すると、簡潔にまとめられているが、重要な項目が網羅されており、学生と共に討議しながら各感染症を理解するには大変有用な教科書であり、今後はこのような看護の視点を明記した教科書を編集すべきであると考えた。この著者およびその協力者は、今後紙媒体ではなく、e-Bookのような出版形態を考えていると語っていた。このような活動を支えることは、看護師として重要となると考えられた。加えて、日本のみならず、全世界の感染症患者のQOL向上のためにも、その患者のもつ文化背景を考慮した看護の視点を記載していくことが求められると考えた。

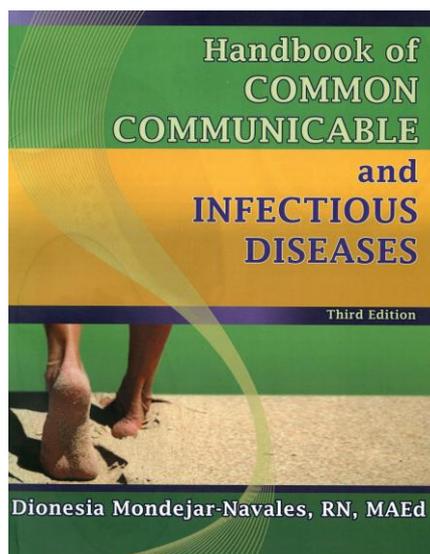


図1. 看護の視点が記載されていた教科書

今回調査を行い、ケアについて明記がないながらも、熱帯感染症に関する教科書は、多数あるため、ここに日本の看護専門職としてケアに当たる場合を想定して記述し、東南アジア等の感染症看護の臨床家とワークショップなどを開催し、ケアを検討する必要があると考えられた。

このような調査を行うことで、日本の看護が如何に患者の背景を丹念に考え、個別性を重視した看護文化を築いてきたかが理解できた。このような観点からの、感染症の教科書を英語で記すことは、世界の看護界への一提言になるのではないだろうか。

(5) マレーシアでの調査

フィリピンでの調査では、十分な成果が得られない場合を想定して手配した、マレーシア大学（国立大学）サバ校附属の看護専門学校で学生の教育に使用されている、感染制御に関する資料を手に入れることができた。

本資料は感染制御を主としたものではあるが、薬剤耐性菌に関する項に並んで、HIV、デング熱、マラリア、真菌症に関する項目立てがなされていて、これらの感染症が重要課題である国の状況が見て取れた。ただし、マレーシアはフィリピンに比較して平均寿命も高く、衛生状態も西太平洋地区の中では平均的な状態であり、効率面から考えれば、感染症を学ぶには、それほど適切ではないと考えられた。

(6) ケアプロトコルの作成

13種類の感染症をターゲットとしたが、そのうち、4種類について、調査内容を踏まえてプロトコル案の作成を行った。しかし、最後の専門家との討論が十分にできてはいないため、今後の検討を要する状態である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6. 研究組織

(1)研究代表者

荒川 満枝 (ARAKAWA Mitsue)

鳥取看護大学・看護学部・看護学科・教授

研究者番号：00363549

(2)連携研究者

宮芝 智子 (MIYASHIBA Tomoko)

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：20321119

岡山 加奈 (OKAYAMA Kanna)

大阪市立大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：20549117